



奇妙なヨーロッパ旅行

津 和 秀 夫*

始めてヨーロッパへ

私にとって、ヨーロッパとくにイギリス・ドイツ・スイスは少年時代からの憧れの的であった。先生から本から、ヨーロッパのことを沢山に教え込まれていたからである。

「一生に一度はヨーロッパへ行きたい」

これは私の夢であった。8月下旬から9月中旬にかけての3週間、その夢がやっと叶えられた。そのとき私は60才に近い初老となっていた。

私には子供の頃から、何となく不思議なことが着きまとう。今度の旅行もその通りであった。これは、その不思議なヨーロッパ旅行の想い出の記である。

知人に会う

私は成田空港から、ソ連機でモスクー経由、真っ直ぐにパリへ飛んだ。機中で先づ阪大造船の鈴木助教授とその友人の大阪府大航空の姫野助教授と会った。姫野君は欧州を経てアメリカに渡り、私が15年前に留学したミシガン大学に1年間滞在するという。「それは奇遇だ」とばかりに、ミシガンの話に花が咲き、ウオッカの盃を傾けている間に、モスクーに着いてしまった。

モスクー空港ではまた、阪大石油化学の笠井教授と会った。彼はヨーロッパ旅行を終えて帰国する途中であった。

オランダのアイントーヘンという駅では、昔からの学会の友、中山さん、竹山さんに会うし、アムステルダムでは京大の垣野さん一行とパツリ出会った。帰途のモスクーでは東大の土井教授から声をかけられた。機中でその土井

先生に似た紳に話しかけて恥をかいた。

最後には成田から大阪までの機中で最初に会った阪大造船鈴木助教授の直上の田中教授に会って縁の不思議さにびっくりした。

こうして大勢の知人に会って、日本の国力とくに大学人の活躍ぶりを肌を感じた。そして旅先でも悪いことはできないものと思った。

離陸の一瞬

私たちの乗ったソ連のIL61型機(写真1)は、巨人機ではないが、後部にエンジン4基を持つスマートな機で、巡航速度900km/hで10,000kmの航続力を持つ。



写真1 成田空港のIL61形機

これが滑走を始めたがなかなか離陸しない。「おかしいぞ」と思ったが、もう仕方がない。運を天に任せるだけのこと、離陸できねば全員一卷の終わり、火葬料節約か、という思いがチラッと頭をよぎった。隣の家内を見ると、知らぬが仏で平気なものである。

そして機は滑走路ギリギリのところで飛び立った。林と岡をスレスレに越えて高度を取り始めた。ヤレヤレである。こんな憶いで死ぬのなら、簡単なものだな、と嬉しくなった。

あとで隣席の団体添乗員に聞くと、この機は

* 津和秀夫 (Hideo TSUWA), 大阪大学工学部, 精密工学科, 教授, 工学博士, 精密工学

いつも35～40秒の滑走で飛ぶのに、今日は65秒かかったので、どうなることかと肚を冷やしたそうである。成田新空港の第1号の貴い犠牲となるところを、昨日成田不動さんにお詣りしたお蔭と信じて、感謝の「まづ一献」であった。

ノートルダムの幽霊写真

東京を午後1時に出発して、夜の9時には「花のパーリー」である。ホテルで少し睡ったと思う間に、セーヌの流れが朝日に輝いている。お上りさんの観光コースとして、エッフェル塔、凱旋門そしてノートルダム寺院を回った。寺院内部ではステンドグラスが余りにも美しいので、3枚の写真を撮った。

日本に帰って、プリントされた3枚を見て驚ろいた。よく見て頂きたい。全く不思議な写真で、科学的説明の限界を越えている。カメラはヤシカのEE、絞りは開放の $f:1.8$ 。このカメラはシャッター速度を自動制御するようになっている。シャッターは1/10秒ぐらいの手答えと覚えている。

写真2では、ノートルダム寺院らしくない青と白のプラスチック(?)モザイクの床をハダ

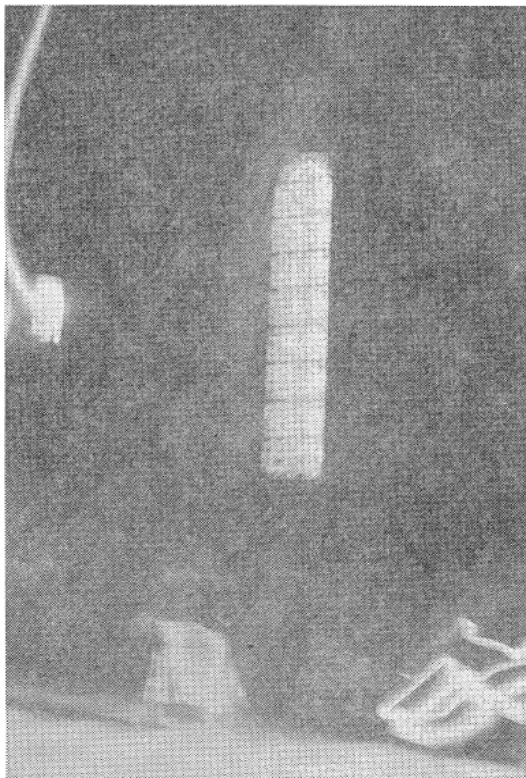


写真2 床と女、その他各所に妖しい光

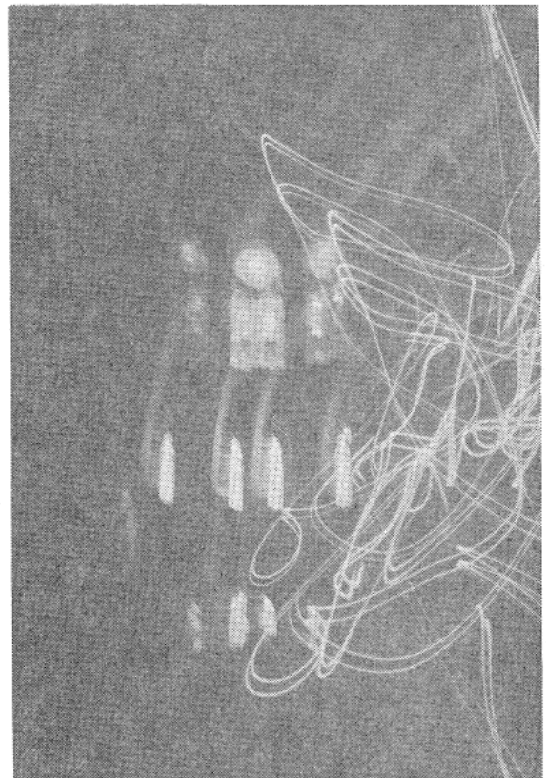


写真3 高速飛翔体と上下2段の輝く
8個の霊(?)

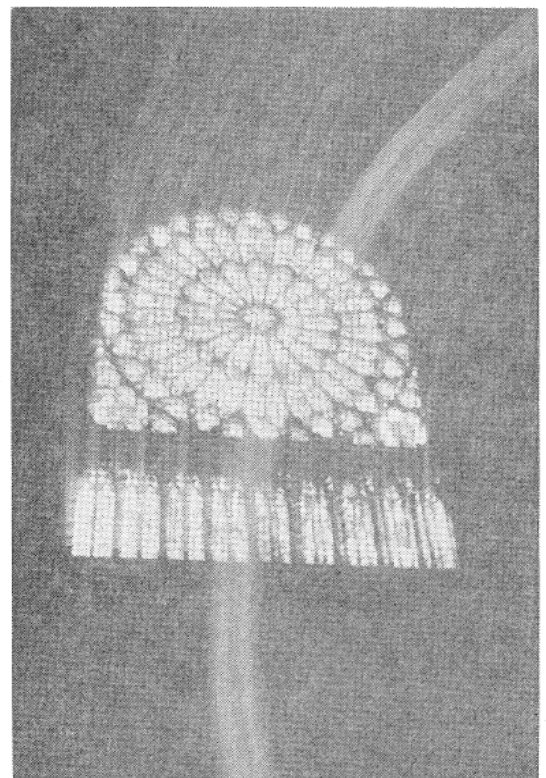


写真4 ステンドグラスと怪光
下から上への1本の強い光線群

シで歩く女性が写っている。彼女の脚が奇妙に写っている。その他各所に妖しい光がある。写真3の高速飛翔光線。1/10秒の間に、これだけの距離を動き、しかも鮮明に写っている光源体は、とてもこの世のものとは思われない。写真4は絵葉書にもある有名なステンドグラスである。ところがそこから円形の美しい光が放射している。そして一番手前にある強烈な1条の光芒。よく見るとこの光の中には沢山の細い七色の光線がゆれながら立ち昇るさまが見える。

ある人は「ゴースト」ではないかと言った。Cohst（幽霊）とはレンズ内で光が複雑な反射をしてできる像と言われている。ゴーストにしても、幽霊には間違いないと、私は思っている。

ノートルダム寺院には、フランス大革命で命を失った王侯貴族の美男美女の霊がウヨウヨしている。その幽界の霊が、日本から遙々訪づれた私を歓迎して、ハッスルした結果が、この写真である。このような幽霊は写っていない。

妻の寝姿

ノートルダムに行った日の真夜中、ふと目覚めると、隣のベッドで妻が他愛なく睡りこけている。その寝姿を見て私は感動した。

遠い地球の裏側まで飛んできて、時差からくる体調の変化を堪え忍び、言葉の通じないパリーで、この女は安心して眠っている。私のようなボンヤリして失敗ばかりやらかす夫に縋べてを託して、よくぞここまで来て呉れた。私はそのとき殊勝な心になっていた。これも昼間にノートルダム寺院に参詣したおかげだろう。

ところが、家内は旅行中いつも厳格で、私は叱られてばかりだった。

管制官のストライキ

成田では離陸のスリル、今度は危うく航空管制官のストライキにでくわすところであった。これも成田さんの「御利益」によって、うまく身を替わすことができた。

8月23日の朝、パリーは濃い霧に包まれていた。その夜テレビを見ていると、空港は飛行機の取り消しで大混乱をしていた。「今朝の霧だ

な」と、言葉のわからない者はのんきに考えて、明朝のロンドン行きの旅については、星空を眺めて安心し切っていた。その通りに翌日の空の旅は快適であった。

ところが、後で友人に聞くと、この日はフランスの航空管制官のストライキだったそうである。フランスで離着陸する機も、大混乱したそうである。私は22日に着いて、23日にはノートルダムに参詣し、24日に出発したので「知らぬが仏」で、よい調子でウイスキーを傾むけていたということになる。

どちらかに1日違っていれば、このストライキに引っかかって、言葉の通じない国で大変な目に会い、楽しかるべき初めてのヨーロッパ旅行も、初っ鼻からケチがつくところであった。

それにしても航空管制官がストライキをするとは、フランスもひどい国になったものである。

ロンドンの白タク

ロンドンのヒースロー空港に着いた。大きな荷物をカートに乗せて運んでいると、大きなオッサンがニコニコして現われて、「何というホテルに行くか」と聞く。そして二つのバゲージを軽々と持って、自分の車のトランクに入れた。白タクとは思ったが、安心して客となった。この車は名の示す通りに白くて大きかった。

オッサンは極めてサービスがよい。他の車をドンドン抜いて突っ走るし、沿道の名所を親切に説明して呉れる。「よいオッサンに当たって幸せ」というのが実感だった。

ところがホテルに着いたときの請求額がベラボーだった。6ポンドのところ42ポンド(18,000円)という。何やら怪しげな料金表を見せる。なるほど42ポンドと書いてある。仕方がないから払うと、彼は大笑い、「よい旅行を」と言って私に握手した。

あとでロンドンのガイドブックを読むと、「白タクに乗るとボラれるから御要心」と書いてあった。その通りにボラれはしたが、またと得難い経験であった。貴い経験には、洋の東西を問わず、お金のかかるものである。

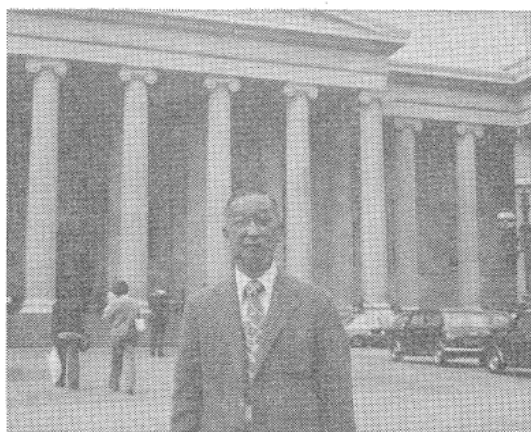


写真5 大英博物館と筆者

バゲージの鍵

ロンドンからオランダに飛んだ。ここで生産工学の国際会議に出席するためである。ホテルに着いて、バゲージを開けようとする鍵がかかっている。「はてな？」と中を見ると引っ掻き回されている。盗むようなものがないから、被害はなかった。

「ロンドン空港では荷物が抜かれる」という話は聞いていた。「なる程なあ」と感心した。ここではこうした労働者は皆外人部隊となっている。荷抜きを厳しく取締まれば、ストライキをする。そして空港の機能はストップする。仕方がない、見て見ぬ振りをするというのが現状らしい。紳士の国、大英帝国も落ちたものである。

パリでもロンドンでも繁華街はこれらの外人部隊に占拠されて、少年の頃に憧れたような面影はない。そしてまた米国は黒人問題で悩み抜いている。侵略したり強奪したりした結果、白人はいま苦しんでいる。因果応報は厳しい天の摂理である。

バゲージ行末不明

その日また、バゲージで大問題が起っていた。京大の岡村教授親娘のバゲージが、アメリカから飛んでくる間に行末不明になったという。全く航空会社のミスである。バゲージは違う飛行機に乗って、飛んでもないところに飛んでしまっていた。私たちは、ここで岡村さん親娘と落ち合って、これからの二週間余りのヨー

ロッパ旅行を楽しむことになっていた。

実は、私たちも去年インドで1日間バゲージと離れたことがあった。それは全く私のミスから出たことだった。「着たきり雀で行こうや」私ののんきな話に妻は猛烈に怒った。どうも男と女の考え方は違うようであった。

とにかく、岡村さんはつとめて明るい顔、お嬢さんも平気顔、私たちも持ち物を融通するつもりである。そして、私にとって一番嬉しかったことは、自分たちの不幸によって、私たちの楽しいヨーロッパを乱してはならないと、岡村さん親娘が心遣いをしていることであった。

その夜、私はハッキリした夢を見た。岡村さんのバゲージが帰ってきたのである。夢の通りに、バゲージは翌日の昼には厳然と空港に鎮座していた。私は岡村さんと二人で受取りに行き、ホテルに持ち込んだバゲージの健在を祝って乾盃した。

ハイデルベルグの運転手

タクシーで観光することにして、駅前で英語のできる運転手を求めた。すぐに若い髭の男が来た。訪づれるところを話して、料金を聞くと、「タクシー代が、25マルク、説明代が5マルク」と即座に答えた。合わせて約3,000円というところである。私たちは嬉しくなって直ぐに車中の人となった。とくに嬉しかったのは「説明代5マルク」という言葉であった。

約3時間、予定以外のところまで案内してもらって、古都ハイデルベルグの歴史と景観を満



写真6 古城に立つ一行と運転手

喫した。彼は愛国者で、有名な古城に立って、「フランスがここを壊わした。あそこも潰した」と物語る。フランス国境に近いこの古都は過去何世紀にもわたって、何回も占領されている。

私は彼をハイデルベルグ大学の学生と見た。夏休のアルバイトをしているのだろう。そのためかハイデルベルグ大学とか、その教授の居住地にある「哲学の道」の説明は詳細であった。

巨人国

ドイツからノルウェー西岸のベルゲンに飛んだ。ここから一泊二日の観光バス旅行で、フョルドを航海し、北の果ての山岳地帯を縫ってオスロに行くためである。

ノルウェーに行く前から、私には一つの心配事があった。それは小便所の便器の高さである。西洋人は足が長いので、自然に機具は高いところに取り付けられている。今まではスレスレに近いこともあったが、まあ何とか間に合った。しかしこれから訪づれる巨人国の北欧は違う。

背伸びしても届かないときには、一步下って砲に高射の角度を持たせ、勢いよくブツ放す。こうしたフィディアを話して、岡村さんと笑い合っていた。

ついにノルウェーの山中のレストランで、恐れていた事態に直面した。一生懸命に爪先立ったところが何とか届いたので、高射砲のフィディアは実行せずにすんだ。しかし、そこに岡村さんが入って来て、不恰格な現場を見られ、笑い話とはなった。

家内はまたホテルのカウンターで宿泊名簿に記入しようとすれば、僅かに顔から上がのぞくだけであるから、書こうにも書けない。鏡は高いところにあるので、覗いても頭しか見えない。食堂ではいつも子供のように、足を宙ブラリンにして食べねばならない。北欧旅行には高下駄が必需品である。

太陽に恵まれないヨーロッパ人は、その光線を沢山受けようとして、自然に高く大きくなる。そして当然色が白くなる。植物でも日蔭のもやしはヒョロ長い。とにかく太陽の子、日本



写真7 美しいベルゲン港の夕映え

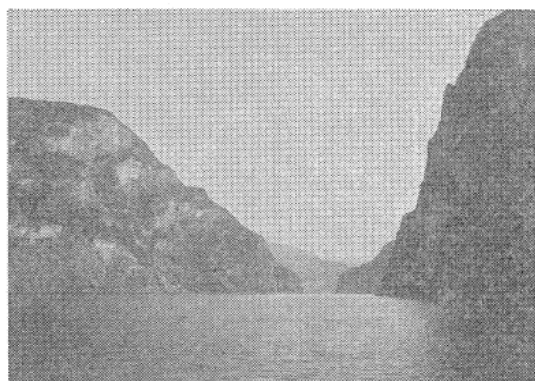


写真8 フョルドの航行
絶壁の間を縫って長く深い水路が続く

人は倅せである。それに引きかえ北欧巨人国の自然は厳しい。

羊の交通事故

ノルウェー山岳地帯の一軒家のレストランで休んだとき、戸外の片隅に羊肉一頭が放り出されているのを見た。皮をはがれ、頭と足を切られ、腹わたを取られた姿は、何ともグロテスクで無惨であった。二人の日本女は眺め得ない。ところが西洋女は可成りの人が見ていた。

そこを出てしばらく走ったとき、バスの前に行くオートバイが羊と衝突し、双方とも路上にブツ倒れた。バスはその横に止まり、運転手が降りた。若い男は起き上がった。服が数カ所裂けている。運転手は打撲傷を負った男を労わるのではなく、逆に怖い顔で叱っている。男は痛さをこらえて応対している。羊は道端で足をケイレンさせて断末魔の様相である。

しばらくすると制服の二人の役人がオートバイで現われ、男を訊問し始めた。そして一人は

羊の傍に行き、やおら腰の山刀を引き抜いて、とどめを刺した。男は足を引きずりながら、倒れた重いオートバイを起こして道路脇に片付けた。誰も手伝ってはやらない。バスは事故現場を出発した。ガイド嬢の説明によって事情がわかった。

如何なる事情があるにせよ、家畜との交通事故は人間が加害者として重く罰せられる。あの男も相当な罰金を払わねばなるまい。私たちの感情とすれば、どうせ羊を殺してマトンにするのであれば、この男は屠殺の手間を省いただけの話である。あんなに厳しくしなくてもよいではないか。そして連想したのは、徳川五代将軍吉綱と「お犬様」の話であった。これも北欧福祉社会の一断面であろうか。

テレビに出演

オスロの一流ホテルに着いて、その食堂に行くと、電気が煌々と輝やき、満員でザワザワしている。何かある、と思った。入って行くと、ボーイは私たちを、ただ一つ残されていた最上の席に招き入れた。見れば私の正面にテレビカメラがあり、監督やカメラマンが忙しそうに立ち働いている。

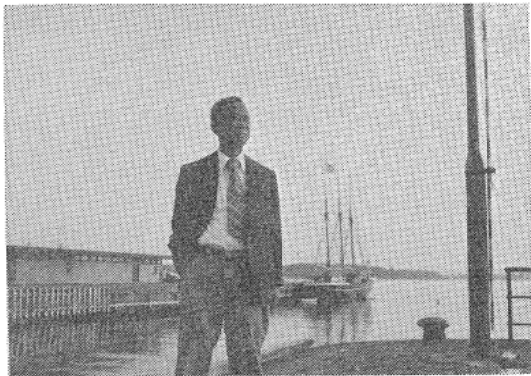


写真9 オスロの港に立つ

主演の老ボーイ長が私に丁寧に語りかけた。「お騒がせしてすみませんが、よろしゅうございましょうか」私たちには、もちろん異存のあろうはずがない。老ボーイ長は、このホテルに50年勤務したオスロの名物男である。彼が私の隣りでラブソングを歌い、カウンターまで歩くというカットである。私も彼とともに主役とな

ったわけである。テレビ出演は初めてのことで、私も大ハリキリでよい恰格をした。

ところがこのテレビ放映はクリスマスである。私は北欧の雪の情緒と美しい自然と、そしてロマンと人情味の溢れる人達に会いに行つて、このテレビを見ねばならない。

スエーデンのサムライ伯爵

岡村さんと私は、首都ストックホルムで日瑞協会主催の会で講演をした。私の話は、日本刀を例に挙げて、修行、技能、入魂という問題についてである。産業界の人士50余名が集まった。

その休憩時間に、立派な紳士が私に名刺を出して話しに來た。その名刺を見て驚ろいた。日本語でつぎのように書いてある。

伯爵 ローベルト・サンドル

世界剣道連盟副会長

欧州剣道連盟会長

スエーデン武道連盟会長

話によれば、スエーデンには700人の剣道家があり、欧州全体では5,000人になるという。伯爵は隔年ぐらいに日本に行き、その道の武道家芸術家と親交を重ねている。そして剣の道や日本刀について、日本人の私がタジタジするほど造詣が深い。

私は「8段ですか」と聞いた。彼は「7段です」と答えた。それから僅かの時間ではあったが、二人は楽しく話し合った。伯爵は宮中の宝剣、天国作と言われる「小鳥丸」(平安時代作、平家重代の秘宝)を見て、いろいろ調べたという。私はびっくりしてその経緯を聞いた。伯爵の答えはこうである。

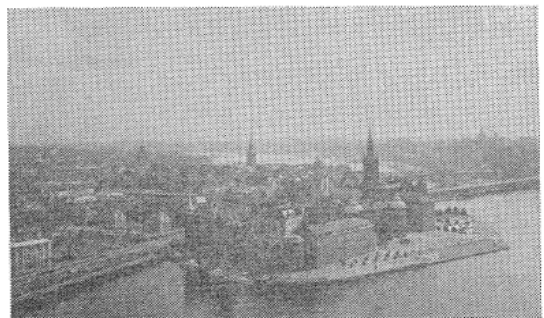


写真10 美しいストックホルムの景

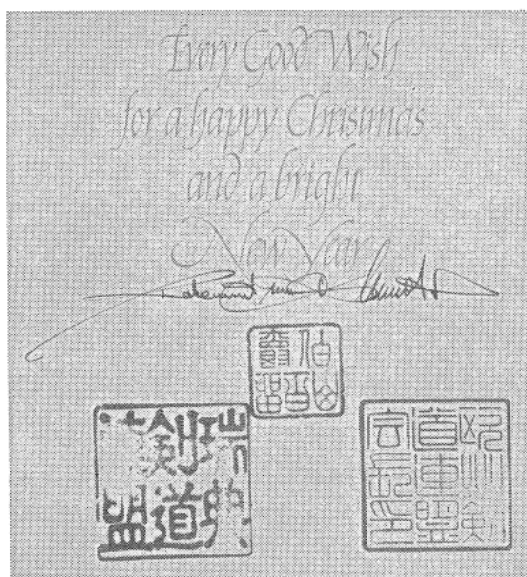


写真11 伯爵からのクリスマスカード。
中央の印は「伯爵山百留（サンドル）」とある

スウェーデン皇太子は剣道愛好家で伯の弟子である。そのためスウェーデン王室から日本皇室に依頼して小鳥丸を調べることができたそうである。

伯はよい日本刀を沢山持っているという。それを見て頂きたいから、邸においで下さいという。しかし残念。私には時間がなかったもので、次の機会を約して別れた。

デコラレーション

モスコー空港で岡村さん親娘と別れて、私たちはモスコー2泊の観光である。今までの旅行は万事岡村さんにお任せしていたので、私はノホホンを決め込んでいたが、これからはハリキらねばならない。

空港に出ると手続が全く煩雑である。しかもロビーは狭くて、人は溢れている。「オレがやって来るから」と家内を待たせて、一生懸命に走り回ったが、サッパリがちがあかない。

結局「荷物申告書」という紙に、「武器・麻薬は持っていません、お金はこれだけあります」などを書いて出せば、即座に関門を通過できるということであった。それを書いてヤレヤレとなった。そのとき出した紙に捺印したものを返してもらった。私はムカッ腹が立っていたので、この紙をクズかごに捨てた。

ホテルに着いて、ドルをルーブルに代えよう

とすると、窓口嬢が「デコラレーションは？」と聞く。私には何のことやらサッパリわからない。ドルを出して押問答していると、西洋人が現われて、「デコラレーションはこれです」と先程の申告書を示して呉れた。

「しまった」と思ったが、後の祭りである。そこで世話係のオバチャンと掛け合い、そのオバチャンが窓口嬢を叱り付けて、やっと私は、モスコーを楽しむためのルーブルを手に入れることができた。しかし家内には、ずい分と叱られた。そして私は「捨てた」は言い難いもので「失った」ですませた。

これですんだかと思って、よい調子で2泊3日のモスコーを楽しんだが、問題はなお、出国時の税関に残っていた。

「デコラレーションは？」と聞かれたが、「ない」と答えざるを得ない。そこで持っていたルーブルを全部出さされて、それをソ連の政府に3年間預金させられた。デコラレーションを失った者に対する罰則である。しかしもらった預り証を出せば、いつでもお金を返して呉れるそうである。おかげで、空港で買う予定のウォッカーとコニャックはオジャンになった。



写真12 赤い広場に立って感無量

家内はハンドバックを引っ掻き回された恨みをも含めて、私のドジを怒り、「あのお金は必ず取り返して頂だい」と意気まいて私には3年以内に、2万円ほどのお金をソ連政府から取り戻すために、再び遠いヨーロッパへ旅せねばならない。ソ連政府に返還させるものは、北方領土と私の2万円である。

赤い恋

モスコーの宿は世界一の大酒店「ロシヤ」

であった。赤の広場の近くにそびえる 300m 角の堂々たる大建築である。その頂上23階に立派なレストランがある。私たちは夕食をとるために、そこに出かけた。

入口には立派な口ひげを貯わえた制服の大男が厳然と立っている。中を見れば満席のような感じである。しかし、折角やって来たのだからと、ひげのおっさんに話しかけた。彼は大男に似合わず意外と鄭重である。「合席でおよろしければ……」という。もちろん私たちに異存はない。

窓ぎわの一番上等の席に案内された。ここからはモスコの灯が眼下に拡がる。この夜はモスコの河のほとりで花火祭があり、遠く故国を離れて旅するもののロマンをかき立てることは限らない。

さて、合席の男女を語ろう。男は50代の偉丈夫、デブプリ肥えて上等の背広を着け、胸には立派なバッジを着けている。私は彼を県知事と見た。公用で中央政府に来て、このホテルに泊まっているのである。

女はグラビヤから抜け出たような美人である。年のころなら20と2、3というものだろうか。ロシア人としては小柄で、美しい顔に、よく手入れをした長い髪がたなびいている。細くて長く美しい指にはマニキュアが塗られている。ドレス、アクセサリー、そして身のこなしと全身から溢れ出るセクシーなムード、彼女こそソ連第一級の女優さんに違いない。

彼と彼女は、私たちが前にいることには一向にお構いなく、肩を抱き合ったり、頬をさすったり、そして時には唇を合わせるのである。その間に私たちに愛想をし、私にウオッカをおごったりというように、忙がしいこと限りない。私たちも料理を食べたり、酒を飲んだり、お互いに話し合ったりで、忙がしい。言葉はもちろんわからないが、手と声と表情で立派に意志は通じる。

やがてバンドが始まった。彼と彼女は待ち構

えていたように手を取り合って立ち上り、踊り始めた。ホールで踊るただ一組である。彼はゴキチないが、彼女の踊りは素晴らしい。ソ連第一級の女優さんに間違いはない。

私たちも、眺めているだけでは失礼にあたるので踊りに加わった。彼と彼女は大喜び、そして他のカップルが続々と踊りに加わり始めた。これは世界の各国からモスコの夜を楽しみに来た人達である。そしてバンドの音色もひときわさえてきた。彼と彼女の組と私たちがすれ違うときには、彼は家内に声をかけ、彼女は私にウインクする。

こうして踊ったり、食べたり、飲んだり、美しい夜景を眺めたりしているうちに、モスコの夜は次第に更けて行ったのである。

成田さん

8月21日大阪を出て成田新空港に着き、その日はホテルで一泊した。成田のお不動さんが近いので、参詣して旅の平安を祈った。

お蔭で3週間の旅は、少々のミスはあっても、それらは総て、またと得難い体験となったし、また楽しい思い出となった。

そして9月12日の朝、機は祖国の空港への着陸体勢に入った。眼下には美しい山野が展開する。街や村や道路が整然と配置されている。「美しい祖国、すばらしい日本に帰って来た」私は心の底から憶うのであった。ヨーロッパは美しく立派である。しかし日本はまた、それと違った美しさ立派さを持っている。しかもヨーロッパは降り坂、日本は昇り坂である。「これは面白くなる。明日からまた頑張らねば」私は心の中で叫んだ。

成田では幸に、夕方の大阪行の飛行機がとれた。私たちは成田のお不動さんに、深々と頭を垂れて、不思議なヨーロッパ旅行の御礼を言上した。